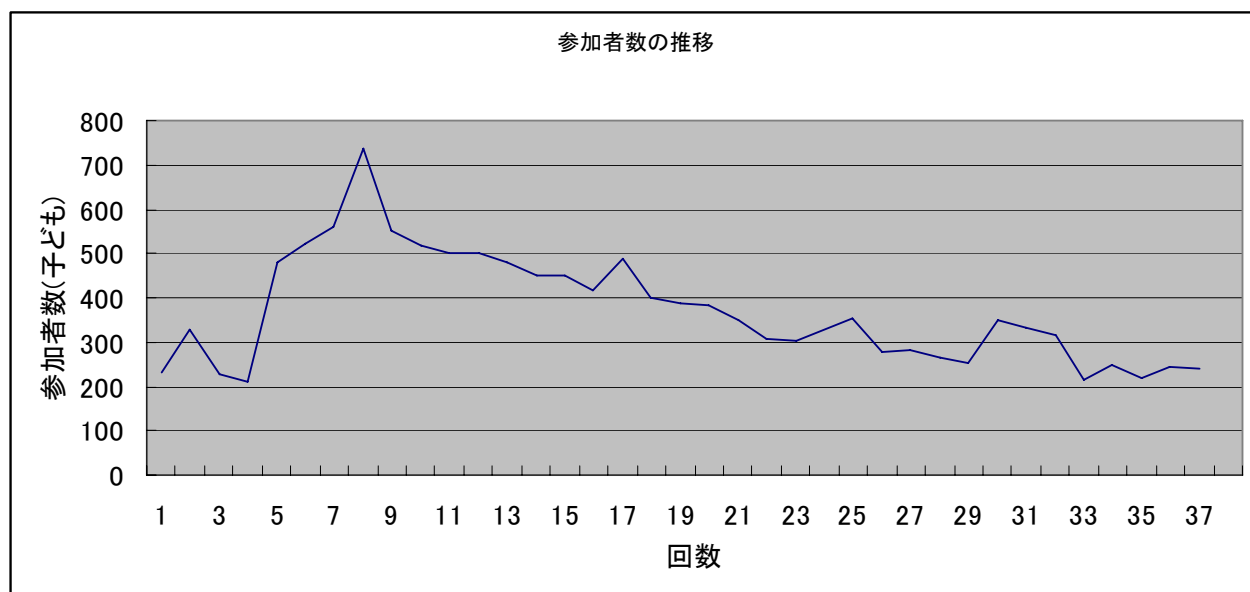


少年少女キャンプ村 40 年の考察

神代洋一

| 暦 | 回数 | キャンプ場 | 子ども | 村数 |
|------|-----|-------|-----|----|
| 1972 | 1回 | 西湖 | | 4 |
| 1973 | 2回 | 伊豆大島 | | 4 |
| 1974 | 3回 | 奥秩父浦山 | 233 | 4 |
| 1975 | 4回 | 奥多摩甲武 | 327 | 5 |
| 1976 | 5回 | 奥多摩甲武 | 229 | 6 |
| 1977 | 6回 | 西湖 | 212 | 6 |
| 1978 | 7回 | 奥多摩甲武 | 482 | 8 |
| 1979 | 8回 | 本栖湖 | 523 | 8 |
| 1980 | 9回 | 本栖湖 | 558 | 9 |
| 1981 | 10回 | 本栖湖 | 735 | |
| 1982 | 11回 | 武尊 | | 11 |
| 1983 | 12回 | 武尊 | 518 | 11 |
| 1984 | 13回 | 武尊 | | 10 |
| 1985 | 14回 | 武尊 | | 11 |
| 1986 | 15回 | 武尊 | 478 | 12 |
| 1987 | 16回 | 武尊 | | |
| 1988 | 17回 | 鹿嶺高原 | | |
| 1989 | 18回 | 鹿嶺高原 | 418 | |
| 1990 | 19回 | 鹿嶺高原 | 488 | |
| 1991 | 20回 | 鹿嶺高原 | 398 | 16 |

| | | | | |
|------|-----|------|-----|----|
| 1992 | 21回 | 鹿嶺高原 | 388 | |
| 1993 | 22回 | 鹿嶺高原 | 384 | |
| 1994 | 23回 | 鹿嶺高原 | 348 | |
| 1995 | 24回 | 鹿嶺高原 | 309 | |
| 1996 | 25回 | 鹿嶺高原 | 304 | |
| 1997 | 26回 | 鹿嶺高原 | 330 | |
| 1998 | 27回 | 鹿嶺高原 | 352 | 12 |
| 1999 | 28回 | 鹿嶺高原 | 276 | 11 |
| 2000 | 29回 | 鹿嶺高原 | 283 | 10 |
| 2001 | 30回 | 鹿嶺高原 | 264 | 9 |
| 2002 | 31回 | 鹿嶺高原 | 254 | 9 |
| 2003 | 32回 | 鹿嶺高原 | 349 | 11 |
| 2004 | 33回 | 鹿嶺高原 | 333 | 10 |
| 2005 | 34回 | 鹿嶺高原 | 315 | 10 |
| 2006 | 35回 | 戸狩温泉 | 215 | 8 |
| 2007 | 36回 | 戸狩温泉 | 250 | 7 |
| 008 | 37回 | 戸狩温泉 | 219 | 8 |
| 2009 | 38回 | 戸狩温泉 | 244 | 8 |
| 2010 | 39回 | 戸狩温泉 | 242 | 8 |
| 2011 | 40回 | 戸狩温泉 | | |



■初期のキャンプ村(第1回～第6回ごろ)

少年団を作り育てる、地域に広げると言う運動的な観点が主 都内を東西南北・都下を南北西のブロックで考える

子どもリーダーを育てる(小5以上の参加)

青年主導のキャンプ村づくり(事務局・生活指導)

3つの目的と役割の明確化

4日間の日ごとの課題の明確化(第4回キャンプ村から)

班から村へ、村から全体へ

一日目：班を基礎にした村づくり、二日目：村がまとまるプログラム

三日目：コース(テーマ)別プログラムと大キャンプファイヤーでの全体交流

自治活動の基本づくり

開村式(目標・約束・テーマソング・運営(自治)委員選挙→村を基礎にした自治活動

班会・村会議・総会・村長会・運営委員会→子どもたちによる話し合い

→「少年少女キャンプの手引き」(1974年発行)

草一平論文：「キャンピングが民主主義の学校」

第3回キャンプ村では、2日目がプログラム別行動だった。

→「少年団とキャンピング」(1976年7月発行)

大出達雄論文：子どもたちが主人公、集団の意思を結集した文化活動、指導とは何か

草一平論文：事前準備が子どもを主人公にする。指導員の役割(プログラム点検、安全管理)

増山均・山本修子論文：キャンプが果たしてきた役割

少年団を生み出し、力をつける。指導員を鍛え、団結させる。父母・教師専門家
家を結集し、センター運動を広げる。

■参加者を増やすことを念頭に(第7回～第10回)

学童村・父母村の設置

きめ細かい組織活動・地域オルグ

コース別の充実(夢と冒険 僕らのキャンプ)

1200人キャンプの実現(過去最大規模)

地域センター活動の活発化。青空学校の広がり。少年団の誕生(最大時180団)

指導員交流会の活動

<地域の運動がキャンプ村の発展を支え、キャンプ村の活動が地域に力を与える>

学童村・父母村の誕生

→「キャンプ活動を豊かで楽しいものに」(1981年7月発行)

神代論文：子どもの体の異変とキャンプ。キャンプの魅力。自治活動とキャンプ。安全・健康管理。指導員の役割。

■自然の中での「豊かな生活」の追及(第 11 回～34 回)

「ワーキングキャンプ」と「地域の暮らし」

1982 年 少年少女東京センターの誕生(出版活動、父母・指導員の交流、地域活動の交流などを意識的に取り組む)→自分たちの生活(地域)に根ざした活動の追及

→「みんなで作る楽しいキャンプ」(1983 年 6 月発行)

大出達雄論文：子どもたちの能動性を引き出す。未知への挑戦の中で確かなキャンプ技術を

神代論文：子どもたちの限りない力を信頼して、自然とゆたかに関わらせる。指導員が先頭に立って、細心かつ大胆に

※ボランティア裁判(刑法上の過失責任を問われる)

→「東京の子ども会少年団 VOL2」(1984 年発行)

神代論文：「4 日間で子どもが変わる」 いじめ問題が深刻化する 1980 年代を背景に

→「キャンプのてびき」(1985 年 3 月発行)

子どもたちを主人公にするために

自治活動、生活指導責任者会議の役割(目標を子どもたちのものに)、自治委員会活動、オリジナルなテーマソング

ゆたかなキャンプ生活を

子どもを支える大人たち

安全・健康管理、父母村で手をつなぐ、要員活動

少年少女を指導するにあたって

→「みんなでキャンプ」(子どものしあわせ別冊 1986 年 8 月)

少年少女東京センターが内容作りの中心に

☆「身近な自然や山里の暮らしへの注目」(第 17 回鹿嶺高原～)

1985 年 開発が進んだ群馬県武尊青少年旅行村からの移動を検討。商業施設ではなく、自前の土地・施設でのキャンプ村の実施を検討。長谷田代原高原、鹿嶺高原を紹介される。

1986 年 長野県長谷村の旧浦分校跡地を入手。

1987 年 中学生夏の学校を開校 生活・学び・地域のつながりを深める力に。

1988 年 鹿嶺高原にキャンプ場を移動。以後 18 年におよび利用。長谷地域との結びつきを深める。

少年少女キャンプ村・少年少女山の家(夏の学校)・大出氏の移住の 3 つが支えに

※ 参加者数の漸減に歯止めをかけ、新しい地域に少年団を広げることを目的に「フロンティア村」を組織

※ 学童村の指導スタッフ体制を組むことが困難になったことと父母の役割を明確にすること、さらには地域ぐるみでキャンプ村に取り組むことを目的に、小学校 1 年生から中三までに参加対象を拡大。

- ※ 父母は、全員スタッフとして関わることで、地域活動の主体者としての成長を期待する。
- ※ 南アルプスの雄大な自然の中での生活作りで、台風や雷雨、炎天下での活動のあり方など、さまざまな経験を積んだ。

→「自然となかよくなる活動」(1993年発行 子ども会少年団)

神代論文：自然と仲よくなるアウトドア団会の一週間

→「キャンプのてびきー生活の基礎編ー 神代著」(1995年?)

■里山再生とキャンプ村づくり(第35回～現在)

長谷村の鹿嶺高原の利用計画の変更にもない、キャンプ場の移動を検討。2005年夏の調査を基に、06年飯山市戸狩温泉とん平高原への移動を決定。

2003年より飯山市の斡旋で少年少女雪まつりを開催。飯山市・戸狩観光協会・地元民宿とのパイプができていた。

→2006年 日本財団助成事業「手作りキャンプ場ワークショップ」

里山の学習・キャンプ場の整備・備品の調達・戸狩トレイルの整備

→2007年 日本財団助成事業「三世代で創る北信州の里山あそびフィールド」

戸狩トレイルの整備・道標設置・MAPづくり

→2010年 里山の自然を楽しむ12のプログラム